

第2回海とくらしの史料館のあり方検討委員会 会議録

日 時 令和3年1月25日(月) 19時00分～20時30分

会 場 上道公民館 集会室

出席者【委員会委員】

宮永 貴幸委員(鳥取県水産試験場 場長)

景 愛子委員(境港水産振興協会 お魚ガイド)

古橋 剛委員(境港市観光協会 事務局長)

赤石 周平委員(境港青年会議所 理事長)

檜山 盛生委員(境港総合技術高等学校 教諭)

金森 俊治委員(境港市小学校校長会 会長)

面谷 明俊委員(海とくらしの史料館利用者代表)

渡部 万里子委員(")

島田 洋子委員(")

【事務局】

市教委(松本教育長・黒崎生涯学習課長・竹内文化体育係長・門脇主事)

市産業部(木村次長兼観光振興課長)

市文化振興財団(佐々木常務理事・佐々木次長・大池館長)

欠席者【委員会委員】

檜山 盛生委員(境港総合技術高等学校 教諭)

<日程>

1. 開会
2. 教育長あいさつ
3. 説明事項
 - (1) 委員会の今後の進め方について
 - (2) 第1回委員会が出た意見について
 - (3) 市議会から出た意見について
 - (4) 専門家の意見について
4. 意見交換
5. その他
6. 閉会

<会議録（要旨）>

◆ 1は省略

◆ 2. 教育長あいさつ

教育長 前回の会議では、それぞれの立場から示唆に富んだご意見を多くいただいた。この海とくらしの史料館については、市議会の皆さまも非常に興味を持っておられて、「しっかりと多面的に検討してこれからの方向性を示してほしい」という宿題をいただいている。例えば「まちづくり」の観点として、他の施設との関連性、市内唯一の史跡「鳥取藩台場跡境台場跡」と隣接しているという立地の活かし方などのご意見をいただいている。また、勝手ながら、この委員会は今年度中に3回開催し、あり方についてまとめ、示す予定であったが、さらに時間をかけて議論する必要があると判断した。そのため、もう1年延長し、引き続き議論をしていただきたい。今後の進め方案については、後ほど事務局から説明する。また、市議会から出た意見なども受けて、これからの意見交換をしていただきたい。

◆ 3. 説明事項

(1) 委員会の今後の進め方について

事務局 説明

※委員から特に質疑なし

(2) 第1回委員会で出た意見について

事務局 以下の①～⑤について説明

- ① 海の展示について
- ② くらしの展示について
- ③ にぎわい作りについて
- ④ 他機関との連携について
- ⑤ 建物の改修について

※委員から特に質疑なし

(3) 市議会から出た意見について

事務局 以下の①～④について説明

- ① 海の展示について
- ② くらしの展示について
- ③ その他展示に係ることについて
- ④ にぎわい作りについて
- ⑤ 他機関との連携について

※委員から特に質疑なし

(4) 専門家の意見について

①清末氏について

②清末氏からいただいた意見について

※委員から特に質疑なし

◆ 4. 意見交換

面谷委員 学習施設という点で、教育の現場として利用されていないというのは大きな問題。第1回委員会でも金森委員より、民具について子どもたちが見ることができるものが少ないというご意見があった。小学校の社会科の副読本で境港について学ぶ冊子が作成されている。内容を教えるとき、その冊子の内容のみで完結しているのか。例えば、港について、魚や漁業について、民具について、歴史についてなどが書かれているが、それらを教えるために利用できる場所が海とくらしの史料館なのではないか。教える側として、当館にどのような不便を感じているか。

金森委員 昔のくらしについて学習をする時、実物を見るということは非常に大切。子どもたちに見せるのであれば、たくさん昔のくらしについての道具がある施設へ行きたい。近辺で探すと、山陰歴史館などが当館に比べて展示も多く、充実しているので、そちらに行く。

また、市議会から出た意見のうちの、美保関沖事件や玉栄丸などの戦争・平和に関する展示の常設については非常に興味深い。小学校6年生で平和学習を行うが、広島原爆や大山口列車空襲についてクローズアップされ、境港の戦災について子どもたちが学ぶ機会はあまりない。最近玉栄丸については、根平雄一郎氏が小学生向けに絵本を発刊され、よりこれらの事件が身近に感じられるようになった。このような流れの中、くらしについての展示より、平和学習についての展示にする方がより小学生が学べる展示になる。常設展示に加え、実際に戦争を経験した方の語り等も聞くことができれば、なおよい。

宮永委員 衣食住の「食」についての展示がない。「食」にスポットを当てるのがよいと考える。「魚離れ」が進み、魚食普及について取り組む中で水産業者のアプローチだけでは手が回らない部分もある。是非食育についても、応援をしていただきたいと思っている。伝統的な食文化について、境港は鳥取県内でも特殊な地域だと感じるので、境港の食文化を伝える施設というあり方も検討してほしい。また、水産試験場の立場として、議会から出た「近海の家から獲れた珍しい魚類の収集・はく製化」について意見が出ているが、水産試験場には珍しい魚が持ち込まれる。非常に珍しい魚は冷凍保存しているものもある。これまではそういったものを入手した際鳥取県立博物館に連絡をし、不要という回答をいただいた場合は廃棄するように

していた。水産試験場は博物館のような役割は担っていないため、非常に珍しいものを入手できても廃棄するという現状がある。もし今後採集・はく製が現実となるなら、水産試験場に声を掛けてほしい。

面谷委員 魚の骨格標本は、作製が難しいか。魚の骨の構造が見られれば、また違う側面の学びが生まれると思う。

宮永委員 骨格標本はアルカリ性の液で魚の肉を溶かして作製するが、その後放置するとどうしても黄ばみ、縮んでしまう。また、魚の細かい骨を貼り合わせる作業もある。魚は進化するにつれて、骨の多いものから少ないものになる。そういった気づきをするきっかけになったり、食育という面でも魚の骨について知ったりできるとよい。現物による骨格標本の作製は非常に難しい。模型だと可能かもしれない。

古橋委員 先ほど面谷委員から骨格標本の話があったが、現物の作製が難しければ、データの活用、学校のタブレットやパソコンなどの活用をしてはどうか。ただそこに展示がしてあるものに子どもたちが興味を持つのかということも疑問。専門家の方による展示や学びについての意見があったが、実際にどのように生きているか、動いているかなどを学ぶためにデータを活用していくとよい。また、人材の育成については、時間やお金がかかる。育成ができるのが一番良いのだが、難しければ音声ガイドなどの導入や、水産振興協会のお魚ガイドさんなど他の機関に協力をお願いすることも検討してはどうか。

景委員 新型コロナウイルスの影響で例年よりツアーの実施が少ない状況だが、来年度に向けて魚食普及の方たちと行う料理教室などの話を市の水産商工課と協議している。これまでも何回か水産振興協会で行っている。市場や水揚げに関しては、境港の小学生のお客さんは最近少なくなっている。小学5年生は例年社会科見学で来ており、スライドと現場の見学で1時間程度。その他「おさかな動画」などを撮影し給食の時間に流すなどして紹介したり、カードなどを作成したりして普及活動に努めている。魚の外見を知っている人は多いが、骨など内側の部分を知らない。古橋委員から意見があったように、捌き方などの動画をその魚のはく製の近くで流し、そこでどんな栄養が含まれているかなどを説明するとよい。

古橋委員 当館は展示スペースが不足しているというのも大きな課題。新しい市場が完成するため、連携を図りたい。

景委員 おさかなロードもあるので、流れを断ち切らずに連携するようなツアーもあってよいのではないか。

宮永委員 展示や連携に関しても、流れ、ストーリーが必要。どんな場所に住んでいて、どうやって獲られて、どうやって食べられるかという一連の流れがあ

れば子どもたちの頭にも入っていきやすいと思う。また、先ほどの骨格標本の話だが、ソフテックスが扱っているレントゲンのようなものを用いた方が展示には扱いやすいと思う。

赤石委員 まちづくりの観点から意見を述べると、VRなどデータの活用が今後大切になる。子どもに「はく製を見に行こう」と言っても興味を示してもらえない。船に乗れる場所などと言って案内すると喜んでもらえるので、体験ができる場所として時代に合わせた形にするのがよい。自分が幼い頃に当館ができてから内容があまり変わっていないというのが一番の問題点ではないかと感じる。また、基本的な耐震強度の話や、避難場所としての活用について検討の意見は出ているか。

事務局 建物については、酒蔵を改造した部分と新たに建て増しした部分があり、建て増し部分は当然耐震強度の基準をクリアした状態。もともと酒蔵だった部分も鉄骨を入れたりして、耐震強度の基準をクリアするように建てられている。避難所としてのあり方としての意見は、第1回では出していない。

赤石委員 津波の際の避難所としての活用も、今後検討してはどうか。

事務局 市内の避難所は民間の建物なども指定をさせていただいている。津波を想定すると2階部分に避難ということになるが、海から近い位置に建っているため避難所としては適切ではない。また、2階のみだと狭く、収容人数が少ない。

古橋委員 スペースが狭いという話があったが、市として増築は検討していないのか。

事務局 南側の駐車場スペースは実際に車を止められる方がいらっしゃるので、全て増築スペースにすることはできない。元の酒蔵としての外観や雰囲気も大切にしたいので形状の変更など大幅な増築は難しく、現実的に考えて増築は中庭部分の検討程度にとどまる。また、第1回の委員会で説明した通り、現在はく製展示を行っているスペースの上部は吹き抜け部分になっている。開館当時携わっていた職員から、その部分は将来的に床を敷いて利用することも可能と聞いている。

赤石委員 実際来館された方は台場公園を駐車場として利用している人が多い。正式に駐車場を台場公園にして元の駐車場部分に増築することもできるのではないか。

事務局 台場公園、ゴールデンウィークやお盆の時期は水木しげるロードを訪れる観光客用の駐車場になる。そのため、観光客のピーク時には当館の来館者が停めることができないといった状況も懸念される。駐車台数を減らすことは検討してもいいかもしれないが、完全に駐車場を増築スペースにすることは難しい。

- 赤石委員 長い目で見ていくことが大切だと思うので、今後需要が高まるようにするには、提案したような方法も検討してほしい。
- 古橋委員 古い建物としての外観は大切にしていけるべきなのではないかと思う。
事務局 市議会から意見が出た、収蔵庫に保存されたハリセンボンのほく製などの収益化や道の駅構想についても意見を伺いたい。
- 金森委員 ハリセンボンのほく製の収益化について、よいと思うが何か付加価値をつけることが大切だと思う。例えば「嘘ついたらハリセンボン飲ます」という言葉に掛けて「正直者になる」など。ご利益があるなど、何かをつけないと売れないのではないかと思う。
- 景委員 ハリセンボンのほく製は売るほどたくさん余っているのか。
事務局 現在全く使用していないものが約700体ある。開館当時からあるものなので、作製されて20数年は経過している。状態としては目が取れてしまっているものもいくつかある。吊り下げのためにネジが入っているものと、入っていないものと2種類ある。
- 赤石委員 ほく製は、穴を空けるなどの加工は可能か。
事務局 既に加工がされているので、かなり硬くなっている。
- 赤石委員 付加価値という部分を考えるなら、ただほく製として売るよりお香焚きなどのひと加工が必要なのではないか。
- 古橋委員 700体あるといえど有限なもの。また、作製から20数年経っており全て売ることができるかもわからない。一時的にはある程度の財源が確保できるかもしれないが、今後の史料館の活用にとってどれだけプラスになるのかという疑問がある。例えば、これからも新しく作製・販売ができるものであれば名物の土産物にできるかもしれないが、ハリセンボンに関してはそうではない。また、仮に販売するとしても販売できる状態にするのにもコストがかかる。
- 景委員 販売するのなら、700体という数は少ないと思う。
- 面谷委員 要するに使わないしスペースを取るから売ってしまおうということか。
事務局 長い間箱の中にしまわれており、年に1回テレビ局などから貸してほしいと連絡がある程度。また、年に1回程度の頻度で来館者から「販売していないか」という問合せがある。箱の中で使う機会もなく眠ったままなら活用できる方がよいと考えている。
- 古橋委員 例えば、クリスマスシーズンにはツリーに飾るなど、展示として館内で活用できないか。
- 面谷委員 現在展示スペースにある「ハリセンボン通り」にLEDなどを入れて、劣化していったものから交換していくなどすれば余っているものも使用できるのではないか。常設展示には難しくても、イベントの展示に利

用していけばよい。

- 古橋委員 現在展示してあるものも箱にしまっているものも作製時期は同じか。
- 事務局 同じ時期に作成されたものである。
- 古橋委員 売ってしまうよりは、ハリセンボン通りを延長したり、館のデコレーション等に利用したりできるとよい。
- 島田委員 伯州綿の拠点としての「道の駅構想」について。当時の協議の場に参加しており、具体的な話を聞いた。伯州綿だけの施設という訳ではなく、魚の要素（食べられるスペース）なども交えた道の駅のお話をされたように記憶している。「ここに来れば境港のおいしいものも食べられるし、弓浜緋などの境港の大切な文化にも触れることができる」というイメージ。当館は台場公園が隣接しており、駐車場も多くある。また、港があるため海外からのお客さんもキャッチすることができる。以上の点から道の駅をつくる場所としてとても適しているとのこと。自分自身この話はどうなったのか気になっていた。伯州綿に限らずこの地域を活性化するという意味でもとてもよい構想であると当時感じた。
- 古橋委員 平成28年にこの質問が議会で出たということか。また、構想が出てその後何か進展はあったのか。
- 事務局 平成28年に実際に検討しないのかという質問をいただいた。また、この構想の進捗については現在ストップしている状態。建物の改修や指定管理者の見直しなどの必要もある。長い時間や莫大なお金がかかる事業になるため、担当者が市長と協議し、道の駅化について判断するのは時期尚早という結論に至った。当時は改修だけでも2億円程度かかる想定だと聞いていた。また、「食」の発信拠点としては、新しくオープンする直売センターを生かし、今後教育施設として当館と連携していくという方向性を検討している。
- また、伯州綿の拠点については、耐震強度の基準をクリアしていないことを理由に弓浜緋伝承館が利用できなくなった（見学など体験施設としての使用を停止、緋の制作などを行う団体のみ現在使用可能）。
- 渡辺委員 伯州綿や弓浜緋についての体験ができる場所は今現在ないということか。海とくらしの史料館ではそういったものを紹介するイベントは行っていないか。
- 事務局 何度か行っている。高機（たかばた）や綿などを、企画展示という形式で展示することはあるが、体験型のものはない。
- 一番の問題はスペースが不足していること。これがあるとよい、という意見を多くいただいているが、全て現在のスペースに入れることは困難。テーマの見直しや設定について、今後委員の皆さんと協議していきたい。

面谷委員 境港の文化の発信拠点を考えると、まずテーマとして「魚」「伯州綿」「港」が考えられる。さらに今日の意見で出た戦争や平和についての展示など、これらを全て館の中で展示は難しい。全て中途半端になってしまうおそれがある。海とくらしの史料館の1番の弱点は体験型でないこと。その要素がほぼゼロである。実際にそういった活動をしようとした時、スペースの問題、人員不足の問題などが挙げられる。全て展示が難しいのであれば、スケジュールを区切ってこの時期はこの展示をする、という展示のやり方をすればよいのではないか。

また、伯州綿の発信拠点については、非常に曖昧で、道の駅のようにものを売る目的になると、弓浜緋の展示になってしまう。伯州綿の発信拠点としての意味を持つのか疑問に思う。綿の栽培から製品になるまでの過程があるので、「手ぬぐいひらひら」を行った際にも史料等を集めたが、境港市内やその周辺で史料があまり残っておらず苦労した。足りないものは米子市や日吉津村から借りて展示をした。その際に感じた海とくらしの史料館の展示に関する課題として、設備が不足していることが挙げられる。直接人が触ってほしくないもの・珍しいものを展示するための、ガラスケースなどの設備がない。難しいのでパネルを展示となると、非常に平面的な展示になってしまい、おもしろくない。

古橋委員 結局あれが欲しい、これが欲しいという意見は出るが、スペースが足りないという意見に落ち着いてしまう。存続させていくためにどんなテーマに絞ってやっていくかははっきりさせないといけない。今後はそれを絞っていく協議を行いたい。単体でどれだけのテーマを行って、周りどれだけ連携していくか、そのテーマの中でどれだけの展示を行っていくかを考えた方がよい。

渡辺委員 ものも大切だが、子どもの学習につながるような施設にしていきたいなら、専門分野の知識を持った人材の確保は重要。

古橋委員 全体のテーマを決まった時、どこまで取り扱うかによってどれだけの知識を持った人材が必要かも決まってくる。必要な人材についても、検討していきたい。

また、学習施設を中心に現在話を進めているが、観光客も訪れる施設。その面もおろそかにせず、意識した施設にしてほしいと観光に携わる者としては感じる。

景委員 確認だが、1階のケースに入ったはく製は移動できるという認識で間違いなかったか。

面谷委員 まだ移動するのかという協議は行っていない。実際にできるかできないかという情報も欲しい。連携していくためには、他の機関と重複するような展示になってはおもしろくないので、今後具体的な情報を参考にしつつ協議したい。

古橋委員 市場の整備状況やできる設備、誠道小学校が展示の場として本当に使えるのか、他に利用できそうな施設など、具体的な資料があるとより協議しやすい。次回以降はより具体的な情報を事務局に提示してもらい、協議したい。